1920年代後半における宇垣一成擁立運動の諸相
――三月事件前史――

UGAKI Kazushige Cabinet Movement and Its Consequences in the Late 1920s: Prehistory of the March Incident

山口　一樹*

はじめに

> 田中義一内閣の頃、近衛文麿公が宇垣に向つて、『今があなたの潮時です。この一二年の間に機会を掴まねば、あなたは第二の後藤新平になります。総理大臣とならず、総理大臣候補者で終ります。』と云ったそうな。これは筆者が宇垣さんから聞いた話である。（斎藤貢「宇垣一成をめぐる人々」『人の噂』3巻11号、1932年、10頁）

上掲の一文には、後の新体制運動の旗手たる近衛文麿が田中義一内閣期において、1930年代に「政界の惑星」と評されることとなる宇垣一成の行く末を暗示している点に妙味があろう。しかし、筆者の興味からすれば、なぜ1920年代後半に首班となり得なかった段階で、すでに「政界の惑星」たることを運命づけられていたのかである。

これまでの宇垣擁立運動をめぐっては、まず先駆的な研究としては西原亀三日記を使用してその展開を論じた山本四郎氏の論考が挙げられる[1)]。しかし、宇垣擁立運動の性格について重要な論点を示したのが、宇垣を中心とした政民連携運動に「右の人民統一戦線」論と政党政治復活の可能性を見出し

＊衣笠総合研究機構専門研究員

た坂野潤治氏による研究であった[2)]。無論、近年では髙杉洋平氏がその可能性を批判し、そもそも宇垣には「革新」と「現状維持」の両面性があることを指摘している[3)]。

しかしながら、以上の宇垣擁立運動研究は1930年代が主であり、また軍人政治家・宇垣への関心それ自体が1930年代に集中しているといえる。だが、髙杉氏が指摘する宇垣の両面性を理解するにはその政治的成長の検討を通じてでなければ捉えられない。そして宇垣の政治的成長というものを考えれば、それこそ1920年代後半という時期を検討しなければ宇垣における「革新」部分の形成は把握し得ないのである。

ただし、これまでも1920年代後半における宇垣の動向について言及しているものはある。例えば西原が1926年ごろより宇垣擁立に動いていたことについては、先の山本氏や西原の対中経済開発構想を論じた森川正則氏も触れている[4)]。それ以外にも吉見義明氏が平野力三などの無産政党運動関係者や高畠素之などの国家社会主義者と宇垣の関係を検討しており[5)]、また伊藤隆氏は『松本学日記』の記述から宇垣擁立について[6)]、そして前山亮吉氏は鶴見祐輔の宇垣への接近について触れている[7)]。しかしながら、これらの研究は当該期宇垣周辺の政治運動を構造的に捉えるものではない。とはいえ、これらの研究で注目すべきはこの時期に宇垣へ接近したのが既成政党の外部にいた人々だったことである。すでに政党政治が引照基準となっていた当該期において、既成政党およびそれによる「憲政常道」体制に飽き足らない、新たな「革新」を求める勢力が宇垣周辺に集っていたことである[8)]。つまり、単に「現状維持」側になる既成政党とのつながりが加藤高明護憲三派内閣や加藤憲政会単独内閣、第一次若槻礼次郎内閣の陸相を経験したことによって形成されたのみならず、1920年代後半という時期を通じて「革新」とのつながりをもちえたゆえに、宇垣の両面性が形成されたと考えられるのである。

そのため、本稿では1920年代後半における宇垣周辺の政治運動を検討し、

宇垣周辺の運動それ自体がいかなる構造をもつものであったかを、三月事件も射程に収めつつ、論じたい。三月事件は軍ファシズム運動の一里塚、未発のクーデター事件として注目され、そして宇垣流産内閣の要因の一つとなるように宇垣にとっての躓きの石となった問題である。しかし本稿においては、三月事件それ自体に言及するのではなく、むしろ 1920 年代後半の宇垣をとりまく政治運動がいかに三月事件を準備したのかという点で言及したい[9]。それは 1920 年代後半の宇垣の政治的成長において形成された政治的資源———および当該期政治状況———から三月事件は生じる条件をもったと考えるからであって、本稿副題が三月事件前史であるのもそうした点を踏まえてである。

よって本稿は、第 1 章において西原や松本学から政界における宇垣内閣工作を、第 2 章においては宇垣周辺にあった第三党運動を検討する。それは、既成政党や議会などを工作対象とした政界運動を把握するとともに社会的広がりをもつ可能性があった政治運動として、第三党運動を位置づけることで当該期の宇垣周辺の政治的動向を理解するためである。特に第 2 章で扱う宇垣周辺の第三党運動に集ってくる人間たちこそが宇垣にとっての「革新」部分を担保し、また三月事件の前提をなす要素と考えるからである。以上を踏まえた上で、おわりにあたっては 1920 年代後半における宇垣周辺の政治運動と三月事件との関係についても言及したい。

第 1 章　1920 年代後半における宇垣一成周辺の政界運動

第 1 節　宇垣一成擁立運動の出発—西原亀三による貴族院・実業方面への工作—

宇垣内閣論が登場したのは松島遊郭疑獄や朴烈事件などのスキャンダルによって第一次若槻内閣が揺れていた 1926 年 9 月ごろと考えられる。松本剛吉は「去る九月一日以来各種の情報を綜合し之を按ずるに」として薩派による上原勇作中間内閣説や憲政会一部での一木喜徳郎首班擁立説などを記

した上で次のように綴っている。

> 中川小十郎氏は西原亀三抔と暗に気脈を通じ現陸相宇垣氏を推立てんとするものゝ如く、之には公正会連中も居り、藤村男の如きは最も熱心にして、去る八日藤村男が御殿場に西園寺公を訪ねたる時、男は斯の如きことを諷示して、公より冷されたる形跡あり。兎に角、田中、床次共に疵物なりとて、西原亀三の如きは前日田中男を擁護せし時と違ひ、近頃は又々軍閥内閣を夢み居れりと云ふ。[10]

実際、西原の日記には、現状の政党の内実では国難に対応できないとして「挙国一致の主唱に依り宇垣大将を首班とする内閣を成立せしめん為め其基礎として政友本党の領首〔袖〕川原〔引用者注 - 茂輔〕・松浦〔引用者注 - 五兵衛〕両君と研究会の領須(ママ)水野〔引用者注 - 直〕子爵とを肝胆相照せしむるの緊急なるを認め、数日来努力中の処、遂に本日午后九時半水野邸に於て之を実行し良果を結べり[11]」とある。西原はもともと1921年より田中内閣成立に向けて動いており[12]、また水野も同じく田中内閣運動に関わっていた[13]。季武嘉也氏によれば、西原自身、田中が総裁になること自体に批判的で、総裁就任以降は田中と西原の政策的な違いも現れ、次第に距離が出てきたという[14]。

この時期、水野がどこまで西原と歩調を合わせていたかは不明ながら、水野の1926年の懐中手帳の10月25日と書かれたメモ欄にある一つ書きに「田中ノボセ居ルコト」「宇垣ノ話ハ消ヘタカ」とあり[15]、少なくとも水野も田中とはこのころには距離が出始め、そして宇垣への関心を高めていたと考えられる[16]。そもそも水野と宇垣との関係は、清浦奎吾内閣成立時に福原俊丸邸にて水野と福原が会見してからであり、これが「後年における両者の密接な関係をもつに至つた交渉のそも／＼の初めであつた」という[17]。そして憲政会・政友会の連立が崩壊した後の第二次加藤内閣において、水野が陸軍

政務次官に任命されたことによって、宇垣との関係はより深まっていったようである[18]。こうした宇垣と水野との関係もあって、水野もまた西原の宇垣擁立に関与していったと思われる。

とはいえ、この段階で宇垣内閣に実現可能性があったかといえばそうではない。西園寺公望自身がそれを否定しており[19]、また町田経宇より「宇垣陸相の総理候補者云云は当人も大分乗気なりとの噺を聞」いた財部彪海相は「唖笑たらざるを得ず」と記しており[20]、実際政治上において考慮され得るような構想ではなかった。そして台湾銀行救済に関する緊急勅令を枢密院にて否決された第一次若槻内閣は総辞職となり、代わって田中に組閣大命が下ることとなる。

この田中内閣は陸海軍大臣を除く閣僚を政友会より任命した内閣であったが、やはり西原は不満であったようで、「研究会並に公正会に対し吾曹を介して言明せる所信を弊履の如くに棄てゝ顧みず、時局匡救に対しても更始一新の大業甚た怪きものあり。且つ勝田氏〔に欠〕対する入党経緯を無視する」ものであり、「協力せる同志に面目を失し、延て田中との交情を粗にするの已むなきに至る」と記している[21]。西原はこの田中内閣において、三井財閥の池田成彬を蔵相とし、宇垣を内相、勝田、藤村を入閣させ、宇垣に従う代議士30名と勝田・藤村に率いられた貴族院研究会・公正会勢力を取り込むことを構想していたようである[22]。つまり、西原の田中内閣構想は純政友会内閣ではなく、政党のみならず貴族院や財界も包摂した挙国一致内閣であり、今度は宇垣にその期待を寄せたということである。

例えば、1927年6月28日には西原と宇垣は会見し、中国問題、田中内閣の現状、田中内閣と貴院関係、貴族院の本分確立について協議している[23]。そして7月22日には星岡茶寮において宇垣は公正会・研究会有志と会合し、政党の腐敗と二院制の真価を説き、貴族院有爵議員の覚醒と結束を訴えたと記している[24]。田中内閣にて研究会・公正会からの入閣を重視した西原の志向を宇垣もまた意識していたと考えられる[25]。

また財界との提携についても、1928年2月13日条において西原は「年初以来計画の実業家と貴族院との連盟に依り国運の展開を図るへしとの意図は本日宇垣閣下と池田成彬君との会見に依り具体化するの基礎を得た」とし[26]、また2月24日には「池田成彬・各務謙吉・木村楠〔久寿〕彌太・結城豊太郎四君と溝口〔直亮〕伯・水野子・藤村男とも宇垣大将の斡旋にて会合し、爰に国運展開の基を求むへく来二十七日宇垣邸に会合のことに進めしむるを得たり」と記しており[27]、西原は貴族院そして財界と宇垣を結びつけようと動いていた[28]。

このように政界における宇垣擁立の出発点にあったのが西原および研究会を中心とした貴族院のグループであった。実際、西原による宇垣挙国一致内閣を構想した同時期、宇垣は憲政会のみならず政友会、政友本党を批判して「望む所は既成政党を破砕し分解し尽して、所謂国民多数の希望より吹き出し普選の泉より湧き出づる新空気によりて国民は指導せられ政治は実施せられて、其処に生活の安定、国運の発展の新光明を求めんとするにある！！」と記しており[29]、また別の記述でも「某一党一派の人と政治を共にするは敢て辞する所にあらず、否、時に其の必要あることをも承知して居る。乍併余は一党一派の人となるよりも天下の宇垣として仕事をして見たき積りである！！」とも記しているなど[30]、政界刷新と政界乗り出しを意識しはじめていたのである。

第2節　宇垣一成擁立気運の進展と既成政党―松本学による政界工作を中心に―

しかしながら、それでは宇垣と既成政党の関係は大きく距離があったのかといえばそうではない。田中内閣成立前後においても「一面憲政会に於ては一木宮相を説いて宇垣陸相を後継首相たらしめんとして狂奔頗る努めたり[31]」とあるように、憲政会系にも宇垣に接近する人間が存在していたのである。ただし、こうした動き自体は西園寺が松本剛吉に対して「君は曾て宇垣陸相を推すものありとのことを言はれしが、是は事実らしい、そんな者を

やれば現内閣は喜ぶならんが、そんな馬鹿気たことが出来ぬぢやないかと」述べたというように[32]、政党内閣ではなく、宇垣を首班とした憲政会を中心とする中間内閣構想であったと考えられる。

このような憲政会そして後の民政党を中心とする内閣に宇垣を首班として擁立する構想は、1929 年初頭から浜口雄幸内閣成立までの『松本学日記』をみても確認できる。1929 年 1 月 11 日に「民政党の方でも迎へることの気運が大分動いた」と宇垣は松本学に告げ[33]、その後の 1 月 20 日には宇垣を中心に黒田英雄、島田茂、美土路昌一、大山覚威、大山斐瑳麿、そして松本学が大山斐瑳麿別邸にて「天下取りの相談」を行っている[34]。この会合について松本学は、宇垣より「民政党に愛憎をつかして、政友会からの迎へを喜んでおるかのやうな口吻が漏れる。自分〔引用者注 - 松本学〕と美土路とは之に反対の意を表し」ておき、また「直に案を立てることも六ヶ敷いから議会の状勢を観望して、二月の初めに今度は島田の家へ会合して、だん / ＼と具体的方策を定めること」を決めたと記録している。

そして松本学は宇垣内閣に向けて政友会へも接近しており、2 月 1 日には守屋栄夫と会見し、翌日には「守屋と白上〔引用者注 - 佑吉〕と美土路と自分〔引用者注 - 松本学〕」が懇談して、政友会を崩す方法、水野錬太郎を脱党させること、小泉策太郎を働かせること、岡田忠彦を取り込んで脱党させて政界浄化革新運動を起こし、その上に宇垣をもってくることを話し合っている[35]。つまり、倒閣運動と民政党を中心に政友会脱党者など政界浄化を志向する人士も含めた挙国一致内閣の樹立である。そうした動きについては、西原も優諚問題において宇垣や水野と相談し、また副島道正を訪問して「今議会は国家安危の岐るゝの秋なり。此時期に遭遇し之れを展開の機に導くには貴族院を硬化せしめ、政府の瓦解を導くことを要す」ることなどを述べるなど倒閣に動いていた[36]。したがって、貴族院への働きかけにみられるように、直接的ではないにせよ、西原と松本学の動きは田中内閣倒閣にむけてある程度リンクしていたといってよいであろう。

そのためか、松本学は伊賀良一を招いて「一、対支外交の刷新、二、財政の整理、緊縮、三、金輸出解禁を速に断行す、四、社会政策的施設の実行、の四項目を挙げて見た。政治の要点を社会政策に置き、凡ての出発点を社会政策に置くことを特色と」する政綱・政策を書いており[37]、田中内閣崩壊を予想して宇垣内閣樹立に向けて動いていた。しかし、4月5日に美土路と大山覚威、山脇春樹と会食した際には「鈴木〔引用者注 - 喜三郎〕と久原〔引用者注 - 房之助〕とが接近したので政友会もおちつくだらうと云ふ。四谷〔引用者注 - 宇垣〕は今やどちらからも敬遠せられておる形」となっていた[38]。

こうした松本学による動きについて伊藤氏は「宇垣内閣構想は恐らく民政党を中心とした挙国一致内閣」と評価しており[39]、やはり1929年初めの動きもそれまでの挙国一致内閣としての性格が強いといえよう。そして松本学たちとしては宇垣の民政党入りを重視していた。しかし、次田大三郎が浜口に対して宇垣を民政党に迎えるよう勧誘しても、浜口が安達謙蔵に気兼ねしてなかなか煮え切らないと松本学は記録している[40]。つまり、宇垣と民政党との関係において、一番の障害は安達であった。後に牧野伸顕内府が宇垣と親交がある三井系の名古屋財界人である矢田績と会見した際、矢田が朝鮮に赴任する宇垣と会談した時に宇垣より「内地に居るは安達抔の好まざるところ」であり、「敬遠の意味もあるべし」と聞いた旨を伝えている[41]。

したがって、こうした宇垣内閣の基盤とすべき民政党および松本学たちの引き抜き工作の対象であった政友会からも距離を置かれることになった段階で宇垣内閣構想は停頓したと考えられる。それは4月20日において松本学が宇垣と会見した折に以下の話が出たという。

> 小泉策太郎を守屋栄夫が説いて挙国一致内閣を作る運動を起させやうとしておる。水野錬太郎氏も清浦圭(ママ)吾氏を訪ふて、挙国一致内閣を提唱し、清浦氏が山本権兵衛氏を説き、水野氏が西園寺公に説いたと云ふ。

小泉は、浜口、田中、床次、宇垣と一緒になって内閣を組織すべしと云ふ。此世話をするのは宇垣氏において他にない、此斡旋をして貰ひたいと云ふ。[42)]

実際に宇垣が上述の山本挙国一致内閣に関与したかは不明ながら、牧野は日記にポスト田中内閣運動について「純不純の両様あり。為めにする不純の動機に出づるもの多」く、その中で「宇垣大将は此際時局を収むるには山本〔引用者注 - 権兵衛〕伯に若くはなしとの意見」であり、機会があれば牧野に会見したいとして樺山資英・山之内一次を代表して安楽兼道が訪問してきたと記している[43)]。宇垣自身、対中国政策遂行のために元老重臣総出の挙国一致内閣を作ろうと後藤新平と会談を重ね、閣僚として西園寺を中心に山本、清浦、伊東巳代治、金子堅太郎、犬養毅、高橋是清、そして浜口や田中などの政民両党総裁を入閣させるという計画であったが、結局は後藤の死によって流れたと戦後に回顧している[44)]。また、倉富勇三郎枢密院議長は副議長の平沼騏一郎より薩派が斎藤実や宇垣を担ごうとして倒閣を行ったと聞いており[45)]、先の牧野が「為めにする不純の動機」と日記に記したのはこのことを指している可能性はある。いずれにせよ、これ以降の松本学の日記には、宇垣に関わる動きはあまり見られなくなることを考えると、やはり宇垣擁立運動は停滞していったと考えてよいであろう。

以上のように 1920 年代後半の宇垣をめぐる政治運動は、西原を中心とした貴族院方面への進出にはじまり、そして松本学などの岡山県出身官僚による政党方面への工作へと向かっていったといえよう。こうした研究会勢力や官僚層を背景とし、民政党への進出や政友会の引き抜きなど既成政党にも影響を与え、取り込もうとするのが、この時期の政界における宇垣内閣運動であった。しかし、こうした政界運動以外にもう一つ注目すべき動きこそが宇垣周辺に生まれつつあった第三党運動である。

第２章　宇垣一成をめぐる第三党運動と集う「革新」層

第１節　無産政党運動・国家主義運動と宇垣一成

ここで、まず宇垣が自身の支持層というものをどのように認識していたかを確認しておきたい。ジュネーブ海軍軍縮会議に派遣された斎藤実朝鮮総督の代理を務めていた時、宇垣の「今後の進退に関はることが政界の一問題視され」ていた。この時に宇垣は日記に「余の朝鮮再往を可とするものと内地に止まるを可なりとするものと二説がある。後者は余の中央政局より遠かるを今後の雄飛準備の為に不利なりとする者、余の政治的勢力地歩の増進を欲せざるの輩と朝鮮に於ける現在権力の移動を自己に不利なりとする輩と民政党一部に於て前途を憂慮し余を該党に接近せしめ尚進んで党内に迎へんとする輩の意嚮の発露に外なら」ないと記している。また自己の朝鮮行きを可とする人間の中に「現時の混沌たり靡爛せる政界は何れ普選実施後には分解作用が起り更に離合集散の行はるべきこともありはせぬかと推測せらる、其際革新の中心となり新興勢力糾合の中枢とな〔る〕べき素地を作るべく余を現時の低級なる政党の色彩に染しめず現政争の圏外にありて達観し徐ろに潜勢力を養はしめんと欲するもの」もいるとしており[46]、「革新」勢力がすでに自身の周辺に存在していたことを理解していた。

宇垣周辺に出現する「革新」勢力については、元農政官僚で当時衆院議員であった後の革新華族の一人に数えられる有馬頼寧が記録している。例えば、1927 年 3 月 16 日に「美土路、柳田氏と会食」した時には「宇垣氏出盧」について意見交換を行い、「軍部大臣文官制を断行し、思ひ切つた政治革新を断行しきれいに引退されるのなら私等は陰に援助してもよいと思ふ」と記している[47]。また有馬は、大日本正義団主盟・酒井栄蔵や美土路とそれぞれ会見した 1927 年 4 月 19 日に「早晩新勢力の出現を要望する空気起るべし。日本正義団活躍の時必しも遠きにあらずと信ず。宇垣氏も将来はやはり中間内閣でなく新党で行かねば駄目と思ふ」と記している[48]。つまり、宇

垣新党による政界刷新である。

この美土路とは先の松本学を中心とした運動において現れた人物であり、また酒井は宇垣や美土路と同じく岡山出身の人物にして後の三月事件にも関与していたとされている人物である[49]。また 1926 年 11 月ごろに宇垣は酒井と会見しており、「彼は世の中が金の力や法の力や言論の力丈けで動くものと今日の政治家が考へて仕事して居て、右之者以外に人間意志の力の偉大なることを十分に認めて居らぬを、深慨〔ママ〕して居た。全く吾人の意を得たり。世の中を動かして行く原動力であり又中軸たるべきものは人間の意思、思想である。最強の力を有する支配は堅確の意思を有して社会の思想界を制するの人によりて行はるべきである」として酒井を評価していた[50]。

また有馬は「日本農民党の平野〔引用者注 - 力三〕、稲富〔引用者注 - 稜人〕両氏それに群馬の副議長となつた畑桃作氏」の訪問を受け、「農民党のことや畑氏の経歴につき話」をしたようで、この時のことについて「日農党は真面目にさへやつて行けば将来はあると思ふ。日本正義団と提携すること得策と思ふ」と書きつけている[51]。興味深いことに有馬は日本農民党と大日本正義団を結びつけることを考えていたのである。そしてこの日本農民党は宇垣もまた深く関与する無産政党である。

宇垣が日本農民党に接近を始めたのは 1927 年秋であり、読売新聞社顧問の小野瀬不二人が「農村繫栄同盟」の趣旨文をもって平野を訪問したのがきっかけであったという。ここで平野と宇垣、そして当時読売新聞社の経営者となっていた正力松太郎との関係が生じ、そして両者から資金提供を受けたと当時幹事長であった平野は回想している[52]。宇垣自身、平野ら日本農民党との関わりを後に記している。

> 国防の人的要素を為す根拠は農村にある。農村農民の健全は国防の強味である事を兼々痛感しありしが、政友会は農民の味方らしく標榜しありしも彼等議員は資本家の援助によりて多数農民の投票を集むる丈けが

本音で、信に農民の休戚に対して深き関心を持ち居るとも見へざりし。其処で真の農民の味方を政党万能の観ありし当時に於ては議会に在らしむる事が切要であると感じて、当時農民党の招牌を打ちて活動しありし須貝快天、平野力三、畑桃作氏等とも度々会合して意見の交換をなしたりしが余の期待を裏切りて諸氏とは遠ざかり、其後山崎延吉氏等とも会談したる事ありしも明政会関係ではなく寧ろ農村問題の解決を目的として居たりしなり。[53)]

つまり、国防上の関心から議会に農民政党を存在させることが重要であると考え、日本農民党関係者と会っていたというのである。実際、宇垣は1927年10月の府県会議員選挙にて群馬県会議員となった日本農民党の畑桃作に11月7日に会っており、また日記に「彼の主義主張は追々共鳴者も増加し来るべき趨勢にある。是非大成せしめたきものである」と記しており[54)]、日本農民党との関係を深めていたのは確かである。これは吉見氏も指摘するように、宇垣としては「労農同盟」による農民層の思想悪化を警戒するゆえに、「農民は農民党へ！」のスローガンを立てて労農党に楔を打ち込もうとする平野ら日本農民党を援助するに至ったためであろう[55)]。しかし日本農民党は1928年の第一回普選にて当選者を出せず、その後の5月に全国農民組合結成に至る農民組合合同問題においても平野の構想は奏功せず、平野そして宇垣の農民党構想は破綻し、それに代わって国家社会主義無産政党結成へと向かうこととなる[56)]。

この国家社会主義無産政党構想は日本労農党書記長であった麻生久と日本農民党の平野、そして高畠の間で1928年8月から10月にかけて進められた計画であった[57)]。この動きに対して宇垣は高畠を介して麻生に資金を提供したとされている[58)]。そしてこれが同年12月の無産七党合同による日本大衆党成立に繋がっていくのであるが、宇垣などからの資金が流入したことが暴露される清党事件が発生し、結果として平野たちの構想は失敗に終わ

り、平野は日本大衆党から除名されることとなった[59]。

以上のように、昭和初期において宇垣もまた国防上の関心という社会との関係を意識した政治的な動きを見せるようになった。さて、先に宇垣と日本農民党との関係について日記より引用した箇所で、日本農民党の「諸氏とは遠ざかり、其後山崎延吉氏等とも会談したる事ありしも明政会関係ではなく寧ろ農村問題の解決を目的とし」たものであると記している[60]。ここで宇垣は、日記に山崎延吉との関係は山崎が当時所属していた明政会との関係からではなく、農村問題解決のためと書いている。しかし、むしろ宇垣と明政会と関わりがあったゆえに、あえて明政会との関わりを否定的に綴ったと推定できる。その動きとは何であったか。鶴見祐輔ら明政会を中心とした宇垣第三党論である。

第２節　第三党論と宇垣一成擁立運動―鶴見祐輔と尾崎行雄―

明政会は、第一回普選において当選した鶴見を中心に、与野党勢力伯仲の議会状況においてキャスティング・ボートを握って[61]、最終的には既成政党や無産政党に不満を有する勢力を取り込んでいくことを構想していた[62]。この明政会を中心とした宇垣新党に関わる動きがみえるのは、床次竹二郎らの民政党脱党による新党倶楽部結成の時期である。

床次たちは対中問題・思想問題・財政問題・金輸出解禁問題などの実施を理由として民政党を脱党する。床次は脱党した８月１日夜に鶴見に対して入党勧誘の申し込みを行い、また３日には両者の会見が行われている[63]。これに対して鶴見は「宇垣一成氏にして此際、吾等と共に立つの決心を表明せば、余はその方針にて明政会を全国的に拡張し、床次氏の新党と宇垣を背影とする明政会の提携を以て、漸次政界の強力なる新政党を形成せん」として、床次新党には参加しなかった[64]。

その鶴見は床次の脱党が発表されてから「N 氏」なる人物を通じて宇垣と連絡を取り合っており[65]、３日の床次との会見前には宇垣とも会っている。

この時、鶴見は宇垣の決起を促し「貴下が蹶起して政界に入らるゝ決心あらば、今日よりその積りにて同志に暗黙に了解せしめ、以て次の選挙には少くとも二十名の代議士を作り得るの自信あり。貴下若し、余を信せば、この同志を近衛兵として蹶起せよ。然らば茲に真剣なる国民運動起り、昭和維新の端緒を開き得べし」と告げ、宇垣は「全然同感、よろしい。その積りにて準備なさい」と答えるも、自身が天下を取るは不祥事ながらも必要なれば出盧する旨を述べたようであり[66]、明確な出馬意思の表明は避けている。しかしながら以前にも鶴見は1928年7月24日付の宇垣への建策の中で「健全なる少数党を、先づ近衛兵として作ること」を挙げ、「既に自己の親兵を作り得ば、これを譜代大名として身辺を固め、更に外様として、他党の団体を勧誘し総合し、茲に初めて大政党を作り得べし」としており[67]、これらを受けてか、宇垣周辺には近しい動きもまたみられた。

例えば、「十月下旬における政友会の実状」という史料には宇垣第三党の動きとして、清浦を発起人として「小橋一太氏をも参加せしめる手筈」の動きがあったと記している[68]。しかし同史料によれば宇垣第三党運動に対して、政友会の久原房之助逓相による妨害工作があったという。

> 久原氏は大隈〔引用者注 - 信常〕候(ママ)を主宰者とする第三党を作成して実質上は政友会の別働隊たらしめ以つて次期議会を通過せむと試み、更に宇垣氏一派の反田中運動台頭せんとするや、床次氏を煽動して、以つて宇垣氏の第三党運動を妨害したるもの〔と脱〕断定して毫も差支ないのだ（政友ノ新聞記者モ答認シテヰマス）[69]

つまり、床次脱党事件とともに、早稲田系議員を結集させた第三党運動を起そうとした大隈信常が「宇垣氏の第三党運動よりも床次氏に好意を表してゐた関係もあり、宇垣氏の第三党運動は一時挫折の形を採つた」という[70]。この大隈による動きが小寺謙吉などによる「憲政一新会」につながるもので

あり[71]、そのために「1929年7月28日付児玉秀雄宛安岡一郎書簡」が示しているように「仙石貢は昨年宇垣氏に「浜口も今は元気だが追ていそかしくなり寒くなると健康か気遣はれる。解散後の選挙は先づ有利としても肝心要の浜口の健康か洵に心元ない。就てはその際は何んとしても陸相に一はたぬいてもらはんにやならん。旁た陸相の手で今から十人〔ママ〕で廿人でも手足を作つておく必要があらうと老婆心から陸相の前途を思ふて御注意申す」と誠しやかに一新会を切崩して政府党に引張り込まんと」する動きがあったと考えられる[72]。これは鶴見の構想とは違うものとも思えるが、鶴見は田中内閣を倒し、民政党との連立政権を樹立して閣僚になることを目指していたという北岡寿逸の推測もあり[73]、上記のような民政党による宇垣を使った反田中第三党結成の動きであっても、ある程度連携可能なものであったのではないかと考えられる。

では、こうした鶴見の宇垣新党構想はどの段階まで継続していたのか。おそらく1929年6月ごろまでは継続していたであろう。鶴見が『改造』に寄稿した「宇垣一成論」において、宇垣乗出しにおいて「既成政党の借り馬」で「うまく乗りこなせるかどうか疑問」だとする。むしろ例え軍人を辞めて衆議院に出馬してすぐに代議士になれなくとも、「俺は代議士になつて政党を作るのだといふ気を示せば充分」であって、確かに爽快であるものの困難な道ながら「最初少数党をもつて甘んじて将来の大成を期するといふことであつたら随分深刻な変化を日本の政界に与へるのではないかと思ふ」としているように、宇垣新党への期待感を捨ててはいなかった[74]。

しかし、浜口雄幸に大命が下り、浜口民政党内閣が組閣されるに至ると、「自由主義的第三党出現は、非常に困難を増し」、「第三党の中心と嘱目したる宇垣一成、井上準之助両氏の入閣は、第三党の実際勢力を大に削減したること」として、結果的に第三党運動は没落していくと予測するようになり[75]、鶴見の構想は当時にあってはもはや有力なものではなくなっていったのである[76]。

さて次に尾崎行雄と宇垣との動きについて確認したい。尾崎と宇垣の関係についてみえるのが『松本学日記』1929年1月11日条である。宇垣と松本が話した際に「所謂国難の時期だから元老が後援して宇垣氏にやらせるがよい、対支問題は従来軍部の為めに制肘せられて二重外交となった、軍部を圧へるのには宇垣氏がよい、また財政緊縮についても軍部の緊縮が大きな部分を占めておるから、之ににらみのきくものたることが肝要だ、それにも適任であると尾崎が云った[77]」ということであった。

実際、宇垣の日記に某氏と1月8日会談した旨があり、その内容が上記の内容とほぼ同様であるため、この某氏は尾崎行雄とみて差し支えない。この会見で宇垣は尾崎に「余は局外にありても十二分の支持後援を誓ふ旨を談ると同時に、国難の切迫、政党政治の腐敗を痛論し、軍部に威重を有するの士にあらざれば此大事業の遂行は駄目にして兄の政治的経路は此の重寄に耐え得ると認めたり」と述べたという[78]。

この尾崎の動きは、鶴見による第三党運動と同期性をもつものといえるだろう。それは、鶴見が尾崎と会見した折、「自由党創立の件」を説明すると尾崎は「自分ハ永く政党創立に努力し来りしが悉く失望せり。故に加入し得ず」と述べて断っているが、「今回政友会が解散するが如きことあらば自ら陣頭に立ちて第三党創設に努力すべし」とあり[79]、鶴見たちの動きと呼応する可能性は示していたのである。

いつから尾崎が宇垣に接近し始めたかは現時点では確定できないものの、興味深いことに1928年12月ごろのものと思われる永井柳太郎が堤康次郎に送った書簡に「嘗て尾崎行雄氏は宇垣大将を山本権兵衛に比したと聞くが精悍は山本に比すへきも風格は桂太郎に似たるものあり包容力は山本の比にあらすと思ふか如何」とあり[80]、1928年末ごろには尾崎が宇垣に関心を寄せていたことがわかる。しかしながら、尾崎による政界での動きは上記のようなものしか現時点では明らかにできていない。とはいえ、尾崎の動きはむしろ地方に広がっていた可能性がある。次節でその点を論じる。

第3節　地域における宇垣一成擁立の動き

本節では、宇垣擁立運動の地域における事例をみていくが、現在確認できているのは第一普選下の岡山と第二普選下の名古屋である。まず、宇垣の出身地である岡山の『山陽新報』を確認すると宇垣の民政党からの出馬が取りざたされていた[81]。しかしここで興味深いのは、宇垣の出馬候補地が「三重か広島か夫れとも郷里岡山になるかは今の所全然未定」と報じられたことである[82]。現時点で宇垣と広島の関係については不明であるが、三重については候補になった理由の一つには川崎克との関係もあってであろう。

宇垣の出馬に関して川崎が顧問として動いているという観測があり[83]、また陸軍参与官を務めたころから宇垣と川崎は関係を結ぶようになり、「その後の二人をして、ともに相許し、強く相結ぶ導因をなした」という[84]。その上、三重は先の尾崎の選挙区でもあり、川崎もまた尾崎の影響を受けた人物であり、宇垣と尾崎のラインは川崎などを介して生じた可能性がある[85]。しかし、第一普選下の岡山で高まりを見せた宇垣擁立は第二普選においては逆に『山陽新報』紙上では話題とならなくなった[86]。これは第一普選では民政党の勢力伸長上において求められたが、政権党でかつすでに入閣していた宇垣を積極的に取り込む理由がなかったからであろう。

しかしながら興味深いことに、第二普選前に尾崎が「某氏」を介して宇垣に「自重静観」こそが「「有効なる結果を収むるの道なり」との意味を諷し来」たという[87]。なぜ自重か。それは名古屋を中心として宇垣系候補結集が焦点化していたからであろう。宇垣と名古屋の関係については、松本学などによる運動があった1929年2月に宇垣が「名古屋に出掛けて実業家と会見」するとなった際、「其結果も見ねばなるまい」としてしばし形勢観望となったことを考えても、名古屋は宇垣の動向に影響を与える地域であった[88]。この宇垣と名古屋の関係において重要なのが、実は本稿冒頭に引用した文章の著者・斎藤貢である[89]。

斎藤の活動などについては、紙幅の都合もあるため別稿にて詳述する予定

であるが、簡単に示しておきたい。斎藤は「明治廿八年三月廿七日新潟市に生る北海道庁立根室商業に学び明治大学予科日本大学政治科を卒業し操觚界に在る事数年の後現時著述を生業とし雑誌「青年立国」を発刊し傍ら名古屋十字軍購買組合理事長」であり[90]、かつては山本内閣運動や岡野敬次郎内閣運動に参画していた[91]。また「『名古屋を日本の中心とする会』といふ長たらしい名前の会を作」り、所謂「表日本」と「裏日本」両地域を、名古屋を中心として経済的に精神的に結合させ、かつ満州を含む環日本海経済圏構築のために運動を行っており、これが宇垣の日本海中心主義と共鳴したために関係をもつようになったという[92]。

斎藤は、衆院解散を見越して 1929 年 11 月に無産大衆の福祉を阻害する既成政党の打破、資本主義経済の合法的改革を目指す政治十字軍を結成する[93]。そして斎藤は次の総選挙において「宇垣一成鞭撻会で第三党組織の大願をもつて立」ち、かつこれは「全国を通じて立候補する同氏は五十名くらいに及」ぶものであると述べている[94]。この宇垣一成鞭撻会趣意書によれば「我が宇垣一成鞭撻会は政策を条件とするのである。宇垣一成といふ政界と陸軍に実勢力を有する権威ある人物を鞭撻して徹底的軍備縮少をなさしむるを以て目的とする」ものであると宣言する。また既成政党がその信頼を失い、無産政党も政権担当能力をもたない中、「如斯場合にこそ実行的無産党現実無産党の蹶起を必要とする。そしてあらゆる実勢力を活用して大衆政治を実行するがよい」とし、全国大衆とともに宇垣を鞭撻して「日本更生と国民生活の窮迫を打開せむと希望する者は来り投ぜよ」と呼びかけている[95]。まさに全国的な宇垣第三党運動を名古屋から構想していたのである。

こうして政治十字軍・宇垣一成鞭撻会を結成した斎藤は愛知一区より出馬した。そして斎藤を後援していた一人が尾崎であった。立候補においては「1930 年 1 月 14 日付三輪信太郎宛尾崎行雄書簡」をみると、尾崎は民政党から脱党して憲政一新会に加入していた田中善立（愛知一区出馬）との関係から斎藤応援には躊躇していたものの[96]、最終的には斎藤の推薦文を書いて

いる[97]。また「先日も尾崎行雄先生から全国の宇垣大将系と見られる者は徹底的な干渉を受けてゐるから注意せよと忠告された」と斎藤は新愛知記者に述べており[98]、尾崎と斎藤そして宇垣の関係が垣間みえる。また、他にも尾崎と深い関係をもち愛知五区より出馬していた鈴木正吾も宇垣より資金提供を受けていたことからも尾崎と宇垣の協力関係は強く想定できる[99]。

また斎藤は新愛知の記者に続けて、安達の干渉が自分にも来ており、「安達は総理大臣を夢みてゐるが宇垣大将の人気がよくて、この侭で行けば到底実現し得ないからこの選挙に宇垣系を根こそぎ倒して了ふ考えから、かゝる態度をとつて来たものである」とも語っている[100]。

こうした中で斎藤は選挙活動を行うものの、その試みは———社会民衆党への接近を図ったものの———実ることなく落選で終わった[101]。結局、先述の鶴見の予測のように第三党運動は長期的に没落せざるを得なくなったことを選挙結果という形で示されたといえよう。宇垣は民政党大勝という選挙結果を受けて「政党政治の是非は別として国民は今尚党派政治による外策なしとの考は存続して居る。夫れが小会派や中立の甚だ振はざりし主因と認められる」とみていた[102]。無論、宇垣はあわせて国民の「新を求むるの気分も相当に有力に現はれ来りて居る」と認めてはいた[103]。しかし、第三党構想がその実現性を欠く状況においてはもはやその重要性は低下していたであろう。

斎藤によれば、東洋棉花社長で宇垣擁立派にして斎藤の支援者でもあった児玉一造の死を契機に宇垣から離れたという。それは「私は宇垣を自己等の抱懐する方向へ向ける自信を失つた。なぜならば彼の周囲にはあまりに人が多すぎる。しかもそれらの人々は私と考へ方観方を異にしてゐる。多勢に無勢、この綱引には負けて了ふ」ためであるとしており[104]、まさに第三党運動の条件および宇垣に対峙する上で必要な支援者を失った状態では第三党運動は顧みられるものではなかったことを象徴していよう。いうなれば、ここに1920年代後半の宇垣擁立運動の一面としての第三党論は社会的な基盤

をもった政治運動としての可能性を限りなく失い、逆に宇垣擁立運動は政界運動としての性格を強めていったといえよう。それと同時に、台頭する条件を失った宇垣周辺の第三党運動やそれを取り巻く「革新」層は、宇垣にとっては政界運動上での宇垣擁立運動のための「露払い」にしかなり得なくなったのである。

おわりに

以上のように宇垣擁立運動をみてきたわけだが、おおよそ西原や松本学による貴族院や既成政党への政界運動と鶴見や尾崎そしてその周辺に集った「革新」層による第三党運動を通じた国民運動化や地域への働きかけという政治運動としての二つにわけられる。いうなれば、1920年代後半の宇垣の政治的成長は単に政界での首班候補になるのみならず、こうした社会への働きかけも生み出すのであり、かつそれを担ったのがまさに普選を目標として活動し、その目標を達成して次なる「革新」ないし「改造」を求めた勢力なのであった。しかし宇垣第三党運動を存続させる条件を二大政党制による「憲政常道」下の政治状況は許さなくなっていた。そのために社会的な基盤をもっての政治運動としての性格は徐々に失われ、むしろ西原や松本学たちのような政界運動のみが残らざるを得なくなったといえるのである。そうした状況において、宇垣周辺に集った「革新」勢力は議会の外部にその突破口を求めざるを得なくなったのであり、それこそが三月事件の前提になったのである。

また、第三党運動などの宇垣擁立運動を支えた勢力から三月事件に関与する人士は出てきている。先に述べた酒井もそうであるし、また1927年12月12日に大川周明が有馬と会って「宇垣氏との面会、酒井氏紹介のことを約」しており[105)]、大川としても宇垣と酒井との提携をすでに考慮していたといえ、三月事件の前提もかかる運動の中から徐々に形成されていたといえるの

である。その他にもこの第三党運動に関わっていた人間として数え得るのが、三月事件に大川とともに主だって関与する清水行之助である。清水も実は鶴見の政治運動の中に院外団の一人として組み込まれていた[106]。清水と鶴見がどこまで深い関係を有していたかは不明ながら、少なくとも三月事件を起こそうとした大川たちに資金提供することとなる革新華族の一人である徳川義親との会合である二十日会には鶴見の名前が有馬とともにある[107]。つまり、宇垣周辺の政治運動において三月事件に関与する人間関係が重層的に形成されていたといえよう。

そして先述のように第三党運動が示したのは、第三勢力の進出を阻むほどに既成政党を中心とした「憲政常道」体制が強固なことであった。それは国家社会主義運動陣営や社会民衆党に限界を自覚させ、よりラディカルな「大衆動員」を意識させるに至った要因であったはずである[108]。そして、クーデターを企図する北一輝が宇垣と会見した際に「一時は同志かとも疑ひし程なりしも、近日愈々彼〔引用者注 - 宇垣〕が野心家たること判」ったということが示すように[109]、宇垣にとってクーデターや民衆騒擾を企図する「革新」派の動きは政界内での宇垣擁立運動のための梅雨払いとしての役割でしかなかったことである。宇垣からすれば支持層としての「革新」の比重は低く、むしろ政界に働きかけ得る「現状維持」的諸勢力こそが重要になっていたのであり、それゆえに宇垣には「革新」の側面はかつての政治的遺産として残りつつも、その実態としては「現状維持」勢力以外なくなっていたのである。

※ 本研究は JSPS 科研費 21K12860 の助成を受けたものである。

注

1）山本四郎「”政界の惑星”宇垣と西原亀三」上・下『ヒストリア』96・98 号、1982・1983 年。

2）坂野潤治「政党政治の崩壊」同ほか編『日本近代史における転換期の研究』山川出版、1985年。
3）髙杉洋平「宇垣「流産」内閣の組閣過程」『宇垣一成と戦間期の日本政治』吉田書店、2015年。
4）山本四郎「「西原日記」解題」(同編『西原亀三日記』京都女子大学、1983年、以下『西原日記』)、森川正則「1920年代における西原亀三の対中国政策構想と政治活動」(『阪大法学』51巻4号、2001年)。
5）吉見義明「日本大衆党と清党事件」(1)(2)『史学雑誌』82篇4・6号、1973年。また田中真人氏は高畠素之の思想を分析しつつ、高畠と宇垣の関係について論じており、高畠側の構想については『高畠素之』(現代評論社、1978年)を参照されたい。
6）伊藤隆「解題」同ほか編『松本学日記』山川出版社、1995年、以下『松本学日記』。また同氏は1927年の有馬頼寧周辺の新党運動に関する論文において、宇垣内閣論についても多少触れている(同「昭和初期の有馬頼寧と新政治組織計画」衆議院憲政記念館編『憲政記念館の二十年』衆議院憲政記念館、1992年)。
7）前山亮吉「第三党・明政会の政治技術(昭和三年)」静岡県立大学国際関係学部編『テクストとしての日本』静岡県立大学国際関係学部、2001年。
8）例えば、宇垣が朝鮮総督に就任した際、宇垣の私設秘書となり、また宇垣に関する著書を残す鎌田沢一郎は、鶴見祐輔の第三党運動と宇垣との関係を示しつつ、宇垣への「仕官」を願い出ている。まさに宇垣の周辺にはこうした「革新」勢力に連なる人材がいたことの一例といえよう(「1931年6月21日付宇垣一成宛鎌田沢一郎書簡」宇垣一成関係文書研究会編『宇垣一成関係文書』芙蓉書房出版、1995年、166‐167頁)。なお鎌田の経歴などについては飯田棹水ほか編『孤高の哲人・情熱の歌人 鎌田澤一郎』(海外協会、1973年)参照。
9）三月事件についてはそれなりの蓄積があるので、本稿に関わりがあるものだけを挙げると小林道彦「三月事件再考」(『日本歴史』713号、2007年)や、右派社会主義運動側から検討した福家崇洋「右派社会運動とクーデター未遂事件」(『戦間期日本の社会思想』人文書院、2010年)、そして社会民衆党との関りから分析した渡部亮「「大正デモクラシー」の政党化構想のゆくえ」(『史学雑誌』128篇8号、2019年)がある。特に小林道彦氏のクーデター事件から民衆騒擾までのグラデーションをもつものとして三月事件を捉えた点は示唆を受けている。
10）岡義武ほか編『大正デモクラシー期の政治―松本剛吉政治日誌―』岩波書店、1957年、1977年第2版、1926年9月15日条、以下『松本剛吉日誌』。
11）『西原日記』1926年9月9日条。
12）西原の政策構想や田中内閣運動については季武嘉也「田中義一内閣樹立運動」(『大正期の政治構造』吉川弘文館、1998年)参照。
13）水野直による田中内閣運動や協力については西尾林太郎『水野直とその時代』(芙蓉書

房出版、2021年、244‐276・327‐328頁）参照。

14）季武前掲書、399‐400頁。

15）「〔懐中手帳　大正十五年〕」『水野直関係文書』国立国会図書館憲政資料室所蔵。

16）田中の政友会総裁就任について水野の伝記では、当時水野がどのように考えていたかは的確に推知できないが、田中への好意は変化しなかったものの「その政党入りを無条件に賛成はしなかつたやうである」と記している（川辺真蔵『大乗乃政治家水野直』水野勝邦、1941年、221頁）。

17）同上、177頁。

18）宇垣は、水野は宇垣の将来についても「色々御心配も下さり、又色々と忠言も試み下さったやうなこともあ」るとともに、宇垣もまた水野に「自分の気付いたことは遠慮会釈なく申上げてご相談もすればお話も申上げる」ようにし、「将来に於て共に今日まで為し来りたるより以上の御奉公も更に為して見たいといふやうな考も持って居った」と述べている（宇垣一成「熱と情熱の子爵」（1930年3月3日談）尚友倶楽部調査室編『水野直子を語る　水野直追憶座談会』尚友倶楽部、2006年、145頁）。

19）『松本剛吉日誌』1926年9月19日条。

20）尚友倶楽部ほか編『財部彪日記』芙蓉書房出版、2021年、1926年11月14日条。

21）『西原日記』1927年5月10日条。

22）北村敬直編『夢の七十余年―西原亀三自伝―』平凡社、1965年、262‐263頁。

23）『西原日記』1927年6月28日。

24）角田順校訂『宇垣一成日記』1巻、みすず書房、1968年、1927年7月22日条、587頁、以下『宇垣日記』。また『宇垣日記』については月日の記載がない箇所もあるため、年月日とページ数を併記し、月日記載がない場合は年と頁数のみの表記とする。

25）その後も優諚問題に際しては「田中首相の行為は累を皇室に及ぼすものあるを感じ、宇垣大将・藤村男・水野子・勝田氏・中川氏等と別々に相議し、前后策を講」じるなど、宇垣と貴族院との連絡を行っている（『西原日記』1928年4月24日条）。

26）『西原日記』1928年2月13日条。

27）同上、1928年2月24日条。

28）西原の対中政策構想と宇垣擁立運動の関係については森川前掲論文（819‐824頁）参照。

29）『宇垣日記』1巻、1926年9月6日条、534頁。

30）同上、1927年7月19日条、586頁。

31）「若槻内閣の瓦解竝に田中内閣成立の顛末」『松本剛吉日誌』568‐569頁。

32）『松本剛吉日誌』1926年9月19日条

33）『松本学日記』1929年1月11日条。

34）同上、1929年1月20日条。なお大山斐瑳麿は煙草元売捌業の実業家で、この会合に出席している大蔵次官・黒田英雄とともに津山出身の出世三羽烏といわれたという人

物である（山陽新聞社編『昭和の岡山 政治と人と』上巻、山陽新聞社、1979 年、123 - 124 頁）。大山覚威は中央公論編集主幹、国民新聞記者、京城日報編集局長、東京朝日新聞連絡部長および調査部長、新愛知東京支社長、毎夕新聞編集局長、そして中外商業新報嘱託という経歴であり、先の大山斐瑳麿の弟にあたるジャーナリストであり（新聞研究所編『昭和新聞名家録 昭和 5 年』新聞研究所、1931 年、112 頁）、美土路昌一も同じくジャーナリストで東京朝日新聞編集主幹兼整理部長を当時務めていた（同上、444 頁）。島田茂は 1927 年から 1934 年まで台湾銀行頭取を務めた人物である（『台湾銀行四十年誌』台湾銀行、1939 年、29 頁）。松本を含めた以上の人物はいずれも岡山県出身である。

35）『松本学日記』1929 年 2 月 1・2 日条。

36）『西原日記』1928 年 12 月 8 日条。ただし田中内閣崩壊までの記述では 1929 年 3 月 6 日に宇垣や児玉秀雄、藤村義朗、坂西利八郎を招待しての「蕎麦会」の記述や、4 月 19 日に水野を見舞い、その翌々日に副島と会見し、死亡した水野の宇垣の代理として見舞いや葬儀に参列したことなどの記述があるだけで（同上、1929 年 3 月 6 日・4 月 19・21・23 日・5 月 4 日条）、対貴族院や宇垣関係の動きは見えてこない。

37）『松本学日記』1929 年 3 月 14 日条。

38）同上、1929 年 4 月 5 日条。

39）伊藤前掲「解題」6 頁。

40）『松本学日記』1929 年 1 月 17 日条。また次田大三郎は後藤文夫とともに宇垣と会見したところ、宇垣が大いに民政党をこき下ろしており、これでは宇垣が政友会に取られるのではないかと次田は述べている（なお次田は、岡山出身の内務官僚であり、浜口雄幸内閣では地方局長を務め、後の宇垣流産内閣時にも組閣に関わっていたという人物である（太田健一「次田大三郎日記の解説」同ほか編『次田大三郎日記』山陽新聞社、1991 年、10 - 33 頁）。また宇垣は、後に自身が既成政党に迎合して総裁たるの野心があるようにみられているが、それは誹謗中傷であり、そのような野心があればすでに達していたし、そうした機会は多くあったという。例えば「田中氏は屢余に政友の跡目相続をなして貰ひたき希望を漏して居た。久原は同氏を隠退せしめて後釜に推さんとしたけれども何れも拒絶し来たのである」と述べている（角田順校訂『宇垣一成日記』2 巻、みすず書房、1970 年、1936 年 5 月 1 日条、1062 頁）。ただし、これが実際そうであったかは不明である。

41）伊藤隆ほか編『牧野伸顕日記』中央公論社、1990 年、1931 年 9 月 14 日条、以下『牧野日記』。

42）『松本学日記』1929 年 4 月 20 日条。

43）『牧野日記』1929 年 6 月 30 日条。

44）宇垣一成述、鎌田沢一郎著『松籟清談』文芸春秋社、1951 年、307 - 309 頁。なお後藤新平の伝記には 1929 年初頭の議会にて田中内閣が危機に瀕した時に「僅かに宇垣

一成と会して、後継内閣に関する談合を試みたるに止ま」るものであったとするのみである（鶴見祐輔編『後藤新平』4巻、後藤新平伯伝記編纂会、1938年、913頁）。

45）「倉富勇三郎日記」1929年7月24日条『倉富勇三郎関係文書』国立国会図書館憲政資料室所蔵。なお西園寺は斎藤あるいは宇垣内閣案を一蹴したという。

46）『宇垣日記』1巻、1927年9月15日条、607頁。

47）尚友倶楽部ほか編『有馬頼寧日記』2巻、山川出版社、1999年、1927年3月16日条、以下『有馬日記』。

48）同上、1927年4月19日条。また有馬は後に美土路と酒井と会見して「宇垣氏の奮起を促しそれが出来たらそれを助けること丶しそれが出来ぬときは又考へる」と記している（同上、1927年6月9日条）。

49）酒井栄蔵は岡山出身の任侠であり、大阪の任侠であった小林佐兵衛の女婿となって二代目小林佐兵衛を襲名し、大阪市電争議などにも関わった人物である（野依秀市編『明治大正史』14巻、実業之世界社、1930年、サ之部38頁）。

50）『宇垣日記』1巻、1926年11月5日条、545‐546頁。

51）『有馬日記』2巻、1927年11月12日条。

52）御手洗辰雄『伝記正力松太郎』講談社、1955年、381‐383頁

53）『宇垣日記』2巻、1934年1月26日条、948頁。

54）『宇垣日記』1巻、1927年11月7日条、622頁。

55）吉見前掲論文（1）、66頁。

56）同上、69‐70頁。なお、興味深いことに軍人の鈴木貞一は大川周明から聞いた話として「宇垣さんが農民党を作って、そうして日本の改革をひとつやろうという話を耳に入れたから、自分はそんなことはいけない。やっぱり全国民を率いて陸軍はやってもらわなければならないということを言った」と述べている（木戸日記研究会ほか編『鈴木貞一氏談話速記録』上巻、日本近代史料研究会、1971年、268頁）。

57）吉見前掲論文（1）、72頁。

58）日本近代史料研究会編『亀井貫一郎氏談話速記録』日本近代史料研究会、1970年、172‐173頁。

59）吉見前掲論文（2）、47‐50頁。

60）『宇垣日記』2巻、1934年1月26日条、948頁。

61）なお明政会は、議会でのキャスティング・ボートを握り、政界刷新を目指す構想を有していた丸山鶴吉や田澤義鋪などが鶴見の決起を促し、結成されることとなったという（丸山鶴吉『七十年ところどころ』七十年ところどころ刊行会、1955年、133‐134頁）。

62）「新党設立に関するメモ」（『鶴見祐輔関係文書』R‐38、国立国会図書館憲政資料室所蔵、以下『鶴見文書』）。同史料中の「声明書―四月初旬に発表」には「既成政党中の進歩分子と無産政党中の漸進主義者との大同団結を目標」と記しており。また同じく

収められている「新党組織の理由」(1928年4月13日)には「政界の分離作用」や「小党分立」による政治を構想していたことが分かる。

63)「床次竹次郎氏と会見顛末」『鶴見文書』R‐39。

64)「床次氏新党樹立前後」『鶴見文書』R‐39。

65) 同上。なお、この「N氏」については不明である。西原の可能性はあるが『西原日記』にはこうした記述はみられない。

66)「宇垣一成氏との会見」『鶴見文書』R‐45。

67)「メモ　宇垣一成氏への建策」『鶴見文書』R‐40。また鶴見は同史料で4～5年は離合集散が生じると予想し、これに乗じて「一大政党創立の大努力を試むべし」としている。

68) イチロ「十月下旬における政友会の実状」『鶴見文書』R-39。同史料は内容から1928年10月下旬のものと推定できる。なお、このイチロなる人物は鶴見と関係をもっていた国民新聞記者の井口一郎と思われる。井口の経歴については田村紀雄「井口一郎新聞学の思想的転回」(『コミュニケーション科学』26号、2007年)参照。

69) 前掲「十月下旬における政友会の実状」。

70) 同上。

71) 桜内幸雄『桜内幸雄自伝』蒼天会、1952年、237頁。また久原房之助翁伝記編纂会編『久原房之助』(日本鉱業、1970年、381頁)も久原が憲政一新会結成工作に関わっていたとしている。

72) 尚友倶楽部児玉秀雄関係文書編集委員編『児玉秀雄関係文書』2巻、同成社、2010年、108頁。

73) 北岡寿逸「鶴見祐輔さんの思い出」同編『友情の人鶴見祐輔先生』私家版、1975年、66頁。

74) 鶴見祐輔「宇垣一成論」(1929年6月4日)『改造』11巻7号、1929年、75‐76頁。

75)「メモ政変に際して」(1929年7月6日)『鶴見文書』R‐42。

76) この第三党運動は鎌田によれば「鶴見の敗北と其外遊によりて全然解消の形態」となった記している(前掲「1931年6月21日付宇垣宛鎌田書簡」166頁)。

77)『松本学日記』1929年1月11日条。

78)『宇垣日記』1巻、1929年、706‐707頁。

79)「十八日協議会記録」所収「尾崎行雄氏と会見」(1928年4月18日)『鶴見文書』R‐38。

80)「12月29日付堤康次郎宛柳井柳太郎書簡」『堤康次郎関係文書』早稲田大学文化資源データベース https://archive.waseda.jp/files/pdf/sdb38/88868/j4jlhIQa_1.pdf、2022年8月25日閲覧。なお封筒の消印には「3」とあるため、昭和3年つまり1928年と推定した。

81) 1928年1月8日付「民政党は第一区から宇垣大将擁立か」『山陽新報』夕刊。なお

『山陽新報』は国立国会図書館関西館所蔵 MF を使用した。

82）1928 年 1 月 15 日付「宇垣大将の立候補　ある消息通『本当』と語る」『山陽新報』夕刊。

83）1928 年 1 月 24 日付「宇垣氏立候補」『山陽新報』朝刊。

84）川崎克伝刊行会編『川崎克伝』川崎克伝刊行会、1956 年、125 頁。

85）「伊賀焼の大家 川崎克君」中外商業新報編輯局編『政治家群像』千倉書房、1932 年、56 頁。

86）唯一発見した記事は宇垣が出馬について記者より尋ねられた際の返答についてのみで、それも郷里から出れば出してはもらえようが、わざとらしくていけないという出馬に否定的な記事のみであった（1930 年 1 月 22 日付「郷里から出れば出して貰へやう」『山陽新報』夕刊）。

87）『宇垣日記』1 巻、1930 年 1 月 16 日条、751 頁。

88）『松本学日記』1929 年 2 月 22 日条。

89）斎藤は橋本徹馬が主催していた雑誌『労働世界』には「斎藤嘲爾」の名前を使用している（例えば「足尾銅山を逃れ出る迄」（『労働世界』4 巻 1・3 号、1919 年））。また憲兵司令部「昭和一三年一一月 主要左右翼運動者関係者名簿」には「斎藤長次」と記載されており（荻野富士夫編『思想彙報Ⅱ』不二出版、1997 年、673 頁）、おそらく「長次」が本名で「嘲爾」を筆名として使い、後に名前を「貢」に改名したと考えられる。

90）「斎藤貢」『大衆人事録第 3 版 ア - ソ之部』帝国秘密探偵社・帝国人事通信社、1930 年、サ之部 64 頁。なお、現時点で斎藤について詳しく言及しているのは伊東久智氏であるので、本稿で触れなかった斎藤の略歴については『「院外青年」運動の研究』（晃洋書房、2019 年）336 - 337 頁注 59 などを参照されたい。ちなみに『青年立国』は「国粋団体及反社会主義団体一覧」（大原社会問題研究所編『日本労働年鑑（昭和四年）』同人社、1929 年、608 頁）によれば紫雲荘系の出版物である。

91）田中宏明「斎藤貢さんのことども」（その 2）『政界往来』47 巻 8 号、1981 年、141 頁。

92）斎藤貢「宇垣大将のこと其他」『蒙古』8 巻 3・4 号、1941 年、195 - 196 頁

93）「無産政党一覧表（昭和五年十月末現在）」『思想彙報』19 号（1930 年 11 月 15 日）吉田裕編『思想彙報』上巻、不二出版、1990 年

94）1930 年 1 月 24 日付「第三党を組織の大願」『名古屋新聞』朝刊。なお『名古屋新聞』は国立国会図書館新聞資料室所蔵 MF を使用した。

95）「宇垣一成鞭撻会趣意書」『青年立国』5 巻 1 号、1930 年、62 - 63 頁。なお『青年立国』は名古屋大学経済学図書室所蔵のものを使用した。

96）尾崎咢堂全集編纂委員会編『尾崎咢堂全集』12 巻、公論社、1956 年、282 頁。田中善立への配慮は、名古屋咢堂会結成に際して田中も賛同者の一人であるなど（1924 年

2 月 24 日付「名古屋咢堂会組織さる」『名古屋新聞』朝刊)、関わりがあったためと考えられる。なお三輪信太郎は名古屋咢堂会結成に奔走した中心的存在である(同上)。そして三輪は「尾崎行雄の崇拝狂であると共にまた大の宇垣党」だという(斎藤貢「再び宇垣一成論」『青年立国』4 巻 4 号、1928 年、9 頁)。

97) 1930 年 2 月 1 日付「斎藤貢君を推薦す」『名古屋新聞』朝刊。なお、「1930 年 1 月 22 日付三輪宛尾崎書簡」には斎藤に会見の上で応援の成否を決める旨を伝えている(前掲『尾崎咢堂全集』12 巻、282 頁)。

98) 1930 年 2 月 15 日付「戒厳令下での選挙も同然」『新愛知』朝刊。なお『新愛知』は国立国会図書館新聞資料室所蔵 MF を使用した。

99) 内政史研究会編『鈴木正吾氏談話速記録』内政史研究会、1975 年、92 頁。

100) 前掲「戒厳令下での選挙も同然」。また尾崎は鈴木の落選についても宇垣と安達の暗闘が影響しているものとみていた(「1930 年 2 月 28 日付三輪宛尾崎書簡」前掲『尾崎咢堂全集』12 巻、282 頁)。

101) 前掲「昭和一三年一一月 主要左右翼運動者関係者名簿」(673 頁)にはこの総選挙において「社会民衆党に入党し尚一面民政党方面と通じ代議士たるべく策動した」とされている。なお、社民党名古屋南支部関係者が斎藤の応援演説を行ったことが発覚すると名古屋内各支部からの反発が生じ、問題化した(1930 年 2 月 18 日付「各支部に漲る反斎藤熱」『名古屋新聞』朝刊)。

102)『宇垣日記』1 巻、1930 年 2 月 23 日条、756 頁。

103) 同上。

104) 前掲「宇垣大将のこと其他」196 - 198 頁。

105)『有馬日記』2 巻、1927 年 12 月 12 日条。

106)「メモ後藤伯没後の政治的結成」『鶴見文書』R - 42。なお鎌田も院外団の一人して記載されている。

107) 徳川義親『最後の殿様』(講談社、1973 年、122 頁)、清水行之助『大行』(原書房、1982 年、217 頁)。

108) 福家前掲書、渡部前掲論文をそれぞれ参照。

109)「藤井斉日記」1931 年 3 月 17 日条(原秀男ほか編『検察秘録五・一五事件』3 巻、角川書店、1990 年、669 頁)。